


 書評

野村総一郎，樋口輝彦，尾崎紀夫 編 標準精神医学(第4版)

佐藤光源

学びやすさと斬新さ

これまでの精神医学の教科書はどちらかというと難解な印象の専門書が多く、医学生や研修医、一般臨床家にとって読みやすく理解しやすいものは少なかった。しかし、この『標準精神医学(第4版)』には、精神医学は難解なものという既存概念を打ち破る斬新な工夫が凝らされており、それが本書の大きな特長となっている。

初版は1986年に医学書院「標準教科書シリーズ」として上梓されたが、特定の学問的立場に偏らない標準的な内容で、医学生・研修医の要望に応えるものであり、さらに医師国家試験の参考書として役立つことをめざして編集された。この基本方針は版を重ねた今回も変わることはないが、この第4版はかなり大幅に改訂されている。それは、読み物的な色彩を持たせるという基本方針が加わって、とても読みやすくなったことである。それには編者とともに執筆担当者の多くが世代交代して若返ったことも関係しているようで、各章の初めに学習目標とキーワードを示し、章の終わりに重要事項を箇条書きで要約しているが、それらに目を通した後で本文を読むといっそう理解しやすい。

総論(207頁)は「精神医学とは」「精神機能とその異常」「精神発達」「精神医学的診察と診断」「精神科治療学」「コンサルテーション・リエゾン精神医学」「精神医療と社会」の7章で構成され、新しい知見を明解に解説している。重点箇所を太字で強調し、イラストを挿入して図表をわかりやすくしているだけでなく、たとえば「精神医学とは何か」の項では、「精神医

学にはロマンの香りがある」「精神医学は科学たりうるか」「精神科医という医者」という見出しで解説し、精神医学を身近に感じさせようと努力している。

各論は12章(234頁)で、「神経症性障害と心身症」「パーソナリティ障害と行動異常」「ストレス反応と適応障害、反応性精神病」「統合失調症」「気分障害」「児童・青年期の精神疾患」「認知症」「器質性精神障害」「症状性精神障害と化学物質中毒などによる精神障害」「睡眠覚醒障害」「てんかん」「精神作用物質使用に伴う精神および行動の障害」を取り上げている。心身症、反応性精神病の位置付けには病因・病態を重視し、摂食障害にはライフステージを重視しているが、わかりやすさを優先したのだろう。

本書の付録には医師国家試験精神科関連問題の解説がついており、国試対策にも役立つであろう。このほか「こころの病を描いた映画」のコラムを新設するなど、精神医学のおもしろさと奥行きの深さを伝えたいという編者の意欲がうかがえる。これからの精神医学・医療・福祉においては、精神障害への偏見・差別の解消が急務とされている。特に医療従事者間の内なるスティグマの解消には、医学教育の段階で適正な精神医学の知識を身につけることが肝要である。そうした意味でも、本書は精神医学への関心を深め、標準的な知識を身につけるのに好適であり、医学とその関連領域の教科書として推奨したい。

(東北福祉大大学院精神医学)

●B5 536頁 2009 定価 6,825円(本体
6,500円+税) 医学書院